

平成26年度研究成果中間報告書《平成26年度指定教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	34	都道府県・指定都市名	広島県	研究課題番号・校種名	3(4)～高等学校～
				領域名	E S D
研究課題	新学習指導要領の実施を踏まえた、学校全体での教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究 (4) E S Dを学校全体で体系的に推進するために、各教科等の連携により、持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を児童生徒に身に付けさせるための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 学校名 (児童生徒数)	ひろしまけんりつみつぎこうとうがっこう 広島県立御調高等学校 (176人)				
所在地 (電話番号)	広島県尾道市御調町神 204-2 (0848-76-2121)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.mitsugi-h.hiroshima-c.ed.jp/				
研究のキーワード	年間指導計画 教科指導 E S D指導内容の整理 教科間のつながり ワークシート				
研究成果のポイント	① E S D年間指導計画を作成したことで、計画的に全教科でE S Dを実施できた。 ② 各教科とE S D指導内容とのつながりを整理したことで、学校全体での取組を推進できた。 ③ 複数の教科で題材とワークシートを共有することにより、教科固有のE S D指導内容を明確にすることができた。				

1 研究主題等

(1) 研究主題

各教科等におけるE S D年間指導計画を作成しE S Dの視点を踏まえた指導方法の工夫・改善を行うことで、生徒に多面的・総合的に捉える力及び協同的に課題解決していく力を育成する。

(2) 研究主題設定の理由

本校は、昨年度から、主に第2学年の生徒が総合的な学習の時間等を利用して、御調地域の「道の駅」及び福祉施設、幼稚園、保育所等と連携して、地域活性化のための方策を考え実践してきた。この教育活動には、地域からは高い信頼と大きな期待が寄せられているが、この取組を通して、本校生徒には、特に次の2つの力の育成が急務であることが明らかになった。

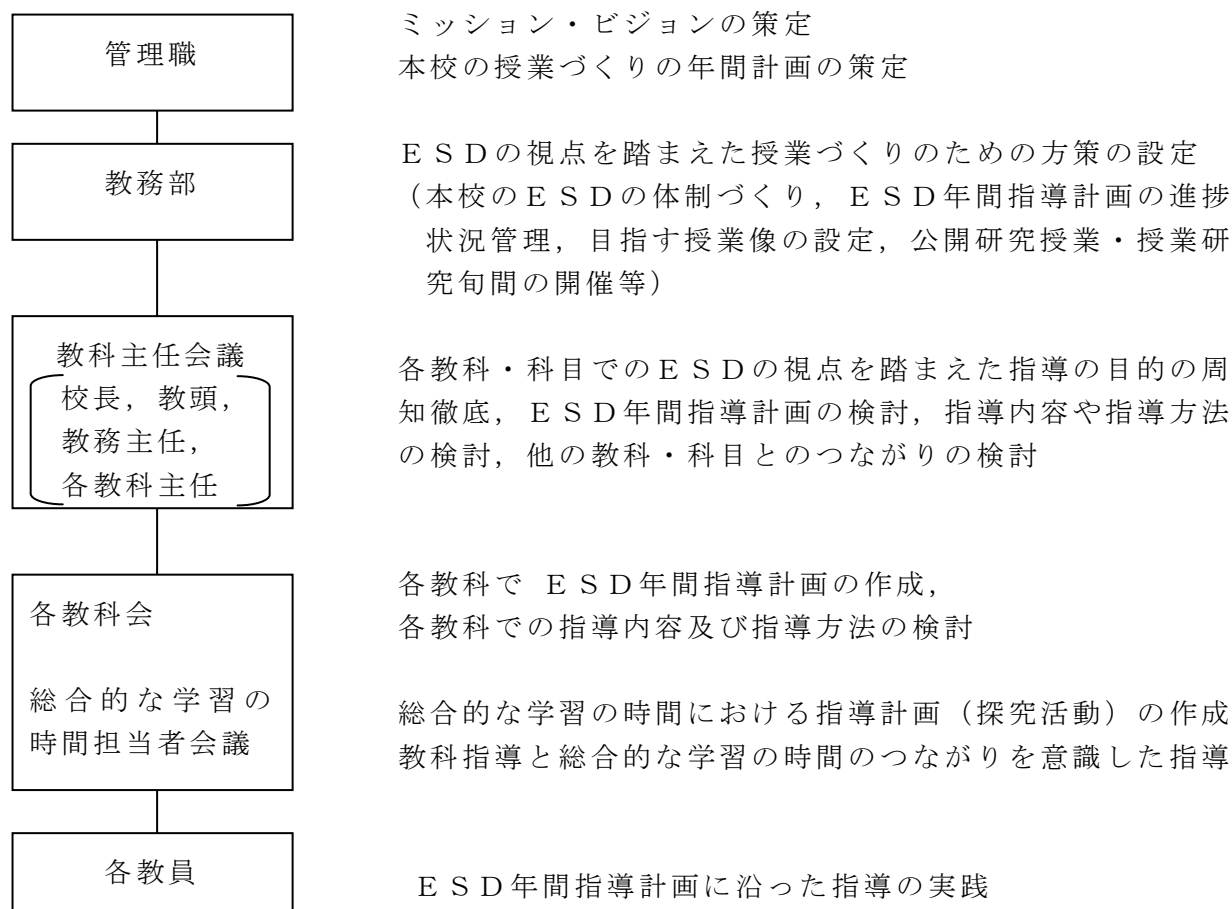
ア生徒は、感情的に物事を判断する傾向があり、冷静に吟味させるためには、多面的・総合的に捉える力を育成する必要があること。

イ地域の人々と連携して活動している生徒の状況から、単に活動を共にすることだけではなく、その活動の目的や意義を明確にして、地域課題の解決に向けた実践力を育成する必要があること。

本校では、各教科の授業でE S Dの視点を踏まえた授業づくりを計画的に行っていくことを通して、生徒に多面的・総合的に物事を考察する力と協同的に課題解決する

実践力を育成できるのではないかと考えた。

(3) 研究体制



(4) 1年間の主な取組

平成 26 年度	<p>(4月) 各教科のE S D年間指導計画の作成</p> <p>(7月) 先進校の視察(愛知県立豊田東高等学校)</p> <p>(8月) 第1回公開研究授業(国語総合, 数学A, コミュニケーション英語I)を実施</p> <p>(10月) 本校にて, 教育課程調査官を招聘しての研究授業(コミュニケーション英語II, 総合的な学習の時間(まなびのとびら)), ステップアップハイスクール支援事業に係る研究授業(リーディング)を実施</p> <p>(11月) 「学校へ行こう週間」での公開授業(現代文, 政治・経済, 体育, 介護福祉基礎), 第2回公開研究授業(化学, 生物, ビジネス実務, フードデザイン, 総合的な学習の時間(未来に生きる)), ICT活用提示授業(地理B)を実施</p> <p>(12月) E S Dの視点を踏まえた教科間のつながりを意識させた授業(生物), ステップアップハイスクール支援事業に係る研究授業(数学I)を実施</p>
----------------	--

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

ア E S D年間指導計画の作成

年度当初に, 各教科で年1回は全ての教員がE S Dの視点を踏まえた授業を行うこととし, E S D年間指導計画を作成した。

イ 先進校への視察

愛知県立豊田東高等学校を訪問し, E S Dの視点を踏まえた授業を参観した。

ウ授業の実践

公開研究授業等の機会でE S Dの視点を踏まえた授業を行い、明らかになった課題を改善した。

エ教科間のつながりを意識した授業

複数の教科で、E S Dの視点に立った教科間のつながりを意識した取組を行った。

(2) 具体的な研究活動

アE S D年間指導計画の作成

各教科等においてE S Dの視点を踏まえた授業が行える単元を整理し、E S Dの構成概念を踏まえた単年度の年間指導計画を作成した。その際、特に2年次の総合的な学習の時間での取組につなげていくために、各教科で行うE S Dの視点を踏まえた授業は、「まちづくり」をテーマとした。各教科で習得した知識や技能を活用し、それを総合的な学習の時間で探究活動へとつなげていくことを意識した。総合的な学習の時間では、御調地域の活性化について考察させ、活動を計画した。

イ先進校への視察

平成26年7月8日にE S D先進校である豊田東高校への視察を行った。豊田東高校を選んだ理由は、地域とのつながりを重視している点など、本校の取組と類似している点があったためである。授業は「異文化理解」と「生物基礎」の二つを参観した。「異文化理解」では、インドを事例にして児童労働問題について考えさせていた。先進国で主に消費されるサッカーボールやチョコレートは、児童労働によって作られていることなどを取り上げ、生徒が関心を持ちやすい授業内容であった。「生物基礎」では、「密閉空間では、短いロウソクと長いロウソクは、どちらの火が早く消えるか」という興味深い問いを立て、実験を通して多面的な見方や批判的思考力、協同して問いを考察して解決する力を育成しようとする授業であった。

視察を通して、教科指導にE S Dを取り入れる際には、生徒が考えたいくなるような教材や発問を工夫する必要があることや、地球環境問題のような大きな問題ばかりではなく、地域社会とのつながりを重視することで、生徒が「持続可能な社会」をより身近に考えることができることがわかった。

ウ授業の実践

8月の公開研究授業で、国語総合、数学A、コミュニケーション英語Iの3科目で、E S Dの視点を踏まえた公開研究授業を実践した。それぞれの教科でE S Dの視点を踏まえた授業を行うことができたが、E S Dの視点を踏まえた授業を作るに当たり、教科指導で達成すべき目標とE S Dのつながりを整理することが必要であることが明らかになった。そのため、事後に教科とE S D指導内容とのつながりを、本校では次のように整理した。

- ①理解レベル・思考レベルでの内容を扱う教科（教科の学習内容を理解し、思考させることがE S Dの視点につながる、「地歴・公民科」「理科」「保健体育科」「家庭・福祉科」「商業・情報科」）
- ②技能レベルでの内容を扱う教科（教科の学習で技能や思考方法を習得させることがE S Dの視点につながる、「芸術科」「家庭科」「商業・情報科」）
- ③情意レベルでの内容を扱う教科（教科の学習がE S Dを考える動機付けとなる、「国語科」「数学科」「外国語（英語）科」）

これらの三つの分類を意識して、その後「国語科」「地理歴史科・公民科」「理科」「保健体育科」「外国語科」「家庭科」「商業科」の科目の授業を実施した。その実践の中では、E S Dの視点を踏まえた授業を行う中で教科固有の目標を達成する授業を実践することができ、多面的な考察を促すことができた。一方、「まちづくり」というテーマ

での授業実践では、テーマが漠然としていて教科間のつながりがつかみにくいということが課題として明らかとなった。

(3) 教科間のつながりを意識した授業の取組

教科間のつながりをより明確にするための取組として、同じテーマを教科固有の視点で取り上げる授業を行った。具体的には、「アウトレットモールを誘致する」というテーマで、「理科」と「外国語」でそれぞれ授業を行った。「理科」では、生態系と生物多様性の単元で、アウトレットモールを誘致することで環境に及ぼす影響について考えさせた。「外国語」では、アウトレットモールを誘致することに賛成・反対という意見を英語で述べることを目標として、その利点と欠点を考えさせ、自分の意見を述べさせた。どちらの授業でも長所と短所を考えさせるという点で、ある程度共通の枠組みを持ったワークシートを作成し使用することで、教科間のつながりをはっきりさせることができた。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

1年目の成果として、次の4点が挙げられる。

ア ESD年間指導計画を作成し、計画的に実施することで、学校全体が組織的にESDに取り組むことができた。また、各教科とESD指導内容とのつながりを明確にすることで、教科指導でのESDが取り組みやすくなった。

イ 教科間のつながりをはっきりさせる手立てとして、同じテーマを取り上げながらも、教科固有の視点でワークシートを作成することが有効であることが分かった。

ウ 教科指導におけるESDでは、教科固有の目標を達成することを第一とし、その中で、ESDの位置付けを明確にすることで、教科指導におけるESDへの取組がより柔軟に行えることが明らかになった。

エ 生徒が、御調地域の「道の駅」で実践している地域活性化の活動は、この「道の駅」を地方創生の拠点となる先駆的な「道の駅」として発展させる一因となるなど、意味あるものとなっている。

(2) 課題

今年度は、各教科がまず取り組める単元でESDを行ったため、同じ題材を扱ったものにならず、教科間のつながりが十分であったとは言い難い。ワークシートによる工夫は有効であったため、今後、教科間のつながりをより明確にした指導を継続して行っていくことが課題である。

また、総合的な学習の時間の活動では、課題解決に向けて実践できているが、活動の目的や意義を生徒が明確に理解しているとは言い難い。よって、活動の見通しと振り返りの機会をさらに充実させる必要がある。

(3) 研究2年目へ向けての取組

教科間のつながりを持ったESDを展開するために、次年度次の4点の取組を行う。
ア 年間指導計画を立案する段階で、年に数回総合的な学習の時間と関連付けたテーマを設定し、各教科固有のねらいを明確にした授業を組織的・計画的に行っていく。
イ 教科間のつながりを明確にするために、ある程度共通のワークシート（雛形）を作成して、それを活用した授業を行う。

ウ 総合的な学習の時間では、課題解決のための各活動の目的や意義を考察させるために、活動の見通しと振り返りの機会を充実させる。

エ 評価指標を開発し、生徒に7つの能力・態度が身に付いたかどうかを検証する。